

## 鎌倉仏師長慶について

林 宏一

Kamakura local Buddhist Sculptor "Chokei"

Koichi HAYASHI

### はじめに

戦国期、武相地方における鎌倉仏師の活動は活発なものがあつたことはよく知られている。筆者は、ここ数年来埼玉県を中心とした彼等の活動事例について紹介・検討をつづけているところだが<sup>1)</sup>、今回は天文年間にいくつかの事績が確認されている長慶(ちょうけい)を取りあげてみることにした。現在知られている長慶の事績は、埼玉県入間市蓮華院の天文16年(1547)銘木造千手観音立像と同18年(1549)、同じく埼玉県比企郡ときがわ町慈光寺の木造千手観音立像の二件である。以下その概要を紹介し、併せて作風の特徴、他の鎌倉仏師との関係等について検討を加えてみることにする。

なお、長慶という名の仏師は、この長慶以外に南北朝時代の応安5年(1372)茨城県水海道市法性寺木造如意輪観音坐像の作者「加賀坊長慶」、同年鎌倉市宝戒寺惟賢和尚像の作者「伊予法眼ちやうけい」の存在も知られているが<sup>2)</sup>、年代的に大きな隔りがあるため、ここでは触れないことをお断りしておく。

### 1. 入間市蓮華院木造千手観音立像(入間市指定文化財)

蓮華院は、入間市春日町二丁目九番一号に所在し、正しくは世音山蓮華院妙智寺といい、真言宗智山派に属する。本寺は高麗郡新堀村(現日高市)聖天院。本尊は不動明王、開山は寂蓮法師と伝え、一説に建仁元年(1201)の開基ともいうが、詳しい沿革を明らかにしない。

当千手観音像は、同寺観音堂の秘仏本尊として伝来したもので、今日なお武蔵野三十三観音霊場第十八番札所として遠近の信仰を集めている。像高は104.5センチメートル、カヤ材の割製、素地仕上げからなり、左右の脇侍には比叡山横川中堂の三尊構成にならって江戸時代後期頃の制作とみなされる不動明王と毘沙門天の立像を配している。その概要は次のとおり。

[形状] 四十二臂千手観音。やや丈の高い垂髻を結び、連珠文を挟んだ紐二条に列弁文を刻む天冠台を付け、左右のこめかみ上あたりに一握りの髪の毛を繞らす。地髪は後頭部を除いて毛筋彫り、髪際は中央でおおきく左右に分かれ鬢髪一条耳にかかる。頭頂に如来面、地髪部周囲



図1 蓮華院千手観音像（正面）

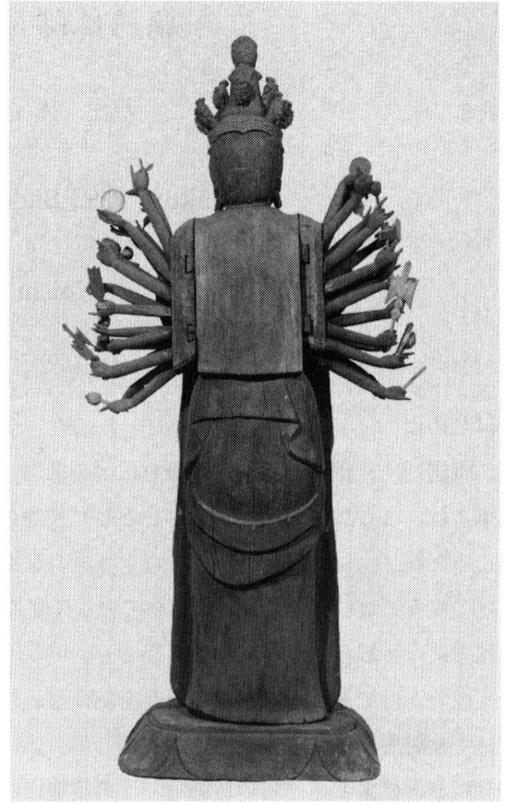


図2 同（背面）

に十個の変化面を二段に分けて配置。額中央に白毫相、頸部に三道をあらわす。耳朶は環状。上半身に天衣・条帛をまとい、下半身を被う裙は上に腰布を当ててウエストで大きく左右に折り返し、深く足元を覆う。腕は正面の合掌手、宝鉢手の四臂に左右の脇手各々十九臂を加えた四十二臂。正面を向き両足先をそろえて単弁十葉の反花座上に立つ。

[品質・構造] カヤ材の割矧造、玉眼嵌入、頭髮を群青彩、眉・髭を墨彩、唇を朱彩する以外は素地仕上げとする。白毫に水晶嵌入。

像の構造は、垂髻を除く頭体幹部を木芯を含んだ一材から木取りし、両耳のほぼ中央を通る線で前後に割り矧ぎ、内刳を施す。前後材の結着は現在鏝で固定。頭部は前面を三道かなり下で、背面は後頭部襟際で割首とする。宝鉢手と天衣は前面材から彫出。合掌手を前膊部から別材とするほか、垂髻及び頭頂部の如来面・変化面、左右の脇手並びに持物、両足先を各々別材とする。脇手の取付は、左右とも背面材の肩口部に角材状の取付基部材を縦に前後三材寄せて、各々別材で造った脇手を各材ごと縦一列に、前から六手、中七手、後ろ六手づつに植え付けている。取付基部材の本体への固定は、本体左右側面の肩下部と脇腹部に設けた上下二本の横棧に蟻柄仕立てでなされており、この頃の千手観音像によく見られる手法といえる。反花座は一材製。



図3 蓮華院千手観音像（右側面）



図4 同（左側面）

[保存状態] 頭上正面弥陀化仏欠失し、背面右脇手取付部材の一部を欠損する。その他頭体幹部材の矧目にゆるみが認められる以外は、大きな損傷、補修はない。

[銘文]（像内納入木札）

（表） 武州入東之郡金子之郷黒須川村世音山妙智寺  
本尊千手観音仏作ニ御座候処。天文十五年正月  
十五日ニ燈明ノ火ニテ炎焼被成。悉舍利被為成。

（裏） 然間同十六年鎌倉仏師長慶願。法印権大僧都覚重  
奉造ス。然則二世安楽故也。

天文十六年八月吉日 根岸光明院覚重敬白

（稲村坦元編「武蔵史料銘記集」1966による）

[法量] 単位センチメートル

像高	104.5	髮際高	90.3	頭頂～顎	28.6	髮際～顎	10.7
耳張	11.8	面張	9.1	面奥	14.0	肩張	21.2
臂張	25.0	胸奥	16.5	腹奥	22.8	裾張	27.0



図5 蓮華院千手観音像（頭部）

足先開(内)	7.0	同(外)	14.0
台座高	8.9	同 幅	40.1
同 奥	30.3		

本像は、像内に納入されている銘札から、天文15年燈明の火による失火で焼失したので、翌16年（1547）8月に法印権大僧都覚重の願により鎌倉仏師長慶が再興造立したことが知られる。現在、この銘札は像内に存在することは確認されるが、取り出すことができないため実見はできない。稲村坦元氏が調査時、どのような状況で銘札を確認されたのか今となってはたしかめようもないが、いくつかの脱字箇所があるように見受けられるものの銘文の内容、形式等に不審なところはないので、これを史料として用いさせていただく。本銘札とは別に『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』）では、本像について「…長三尺、定朝の作、相伝ふ此観音堂は養老年中の起立にて其頃の本尊は行基菩薩の作にて、堂も今

より広かりしが、星霜をへて永禄十一年祝融の災に罹りしより、今の如小堂となれり…」と説いている。定朝あるいは行基菩薩作の伝承はともかくとして、これによれば観音堂は天文15年の火災の後、再び永禄11年（1568）に火災の難に遭っている。この時にはさいわい本尊の観音像は無事であったようで、その後の詳しい沿革は明らかでないものの江戸時代後半の天保6年（1835）に総檜、寄棟造の現観音堂が再建され、その堂内奥深く須弥壇上の厨子内に嚴重に安置されている。

髪際で三尺を測る本像は、豊かに結い上げた髪と卵形にひき締まった顔もち、大きく弧を描く眉と目許涼やかな切れ長の眼、小振りでも端正な鼻と小さく引き締めた唇が作り出す表情に一種繊細伶俐な気品をただよわせている。これに比べると体部の表現はまことに簡素、大づかみなもので、上半身の天衣・条帛はともかく下半身を被う裙の衣文表現は、装飾的な効果をねらいながらも図式的で陰影に乏しいものとなっている。腹前の宝鉢手、肩から臂に懸かって左右の側面を垂下する天衣まで含めて頭体幹部の大半を一材から彫りだしていることもあって、正・背面観、両側面観ともに肩から胸・腰・足許にいたるまで抑揚のないズンドウなプロポーションを見せており、これとは対照的に可憐な表情をあらわす頭部と相俟って一種ひなびた彫刻表現が見てとれる。一重の反花座も造立時のもので、両脇から垂下した天衣の先端部がいったん裾下にたくし込まれて再び反花座の上面から側面に向かって流れでる様子を、武骨ながら

丁寧に彫りだしている。こうした一途で生真面目な彫刻精神は本体の表現にもうかがえるところで、長慶という仏師の個性と技の実際をここに見てとることができる应该说よい。

仏師長慶については後に触れることとして、願主の覚重は根岸光明院の所属とある。この根岸は、江戸時代の根岸小谷田村にはじまる入間市分の根岸ではなくて、黒須川村（江戸時代黒須村）の入間川の対岸にある狭山市分の根岸を指すらしく、『風土記稿』高麗郡根岸村の条に高竹山光明院と号する明光寺の名が見える。同寺は妙智寺と同じく新義真言宗で新堀村聖天院の末寺に属し、近隣で光明院と名乗るのはこの寺しかないことから、根岸光明院はこれに該当すると考えられる。『風土記稿』には、さらに続けて「開山明光明応七年二月廿三日寂す、中興開山覚円元和元年正月廿一日化す、この覚円は明光より七世の僧なりと云」とあり、「覚」字を通字とする僧が江戸初期に居住していたことを記していることから、その可能性は高い。

## 2. ときがわ町慈光寺木造千手観音立像（埼玉県指定文化財）

慈光寺は入間郡ときがわ町西平386に所在し、関東屈指の天台宗の古刹としてよく知られている。本像は、同寺の坂東札所第九番観音堂の本尊として伝来したもので、像高270センチメートルと埼玉県内では他に例をみない巨像である。縁起によれば寺の草創にかかわる由緒ある観音像で、遠く1300年ほど前の白鳳年中に寺の開祖慈訓が春日老翁なる化人から授けられて安置した霊像にはじまると伝える。もとより伝承の域をでる話ではないが、爾来幾星霜を経るなかで幾度かの災禍に遭ったようで、平成7・8年度の観音堂修理にあわせて実施された保存修理<sup>3)</sup>の際に頭部内刳部から発見された墨書銘により、天文18年（1549）大仏師法眼長慶によって造像されたことが明らかとなった。また、同時に体部から享和2年（1802）の再興銘札も確認され、江戸時代後期に江戸仏師鈴木長四郎等により再興修理がなされたことも判明した。まず、像の概要をみておこう。

[形状] 四十二臂千手観音。大きな垂髻を結び、前面のみ連珠文を挟んだ紐二条に列弁文を表した天冠台を付け、左右のこめかみ上あたりに一条の髪の毛を繞らす。垂髻・地髪は後頭部を除いて毛筋彫り、髪際は中央でおおきく左右に分かれ鬢髪一条耳にかかる。髻頂に如来坐像、垂髻中段と地髪部周囲に十個の変化面を二段に分けて配置。額中央に白毫相、



図6 慈光寺千手観音像（頭部・修理前）

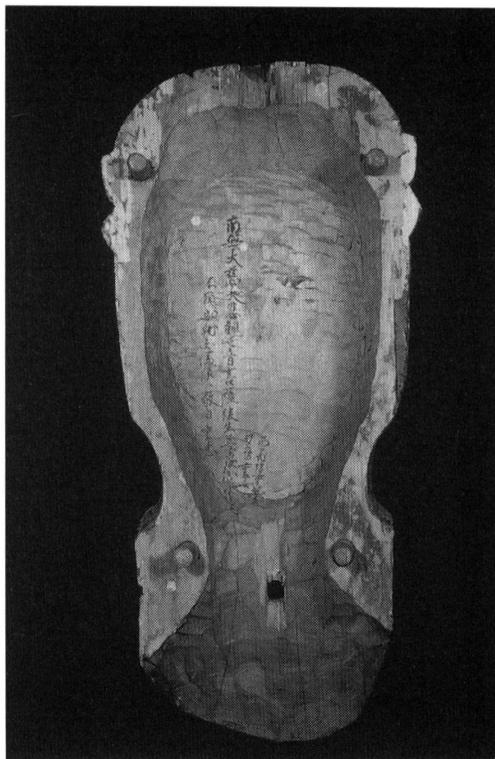


図7 慈光寺千手観音像 後頭部（修理中）

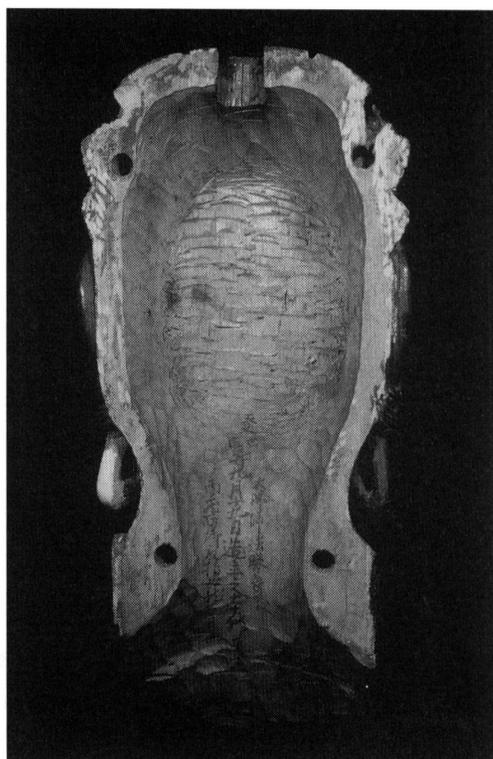


図8 同 頭部前面（修理中）

頸部に三道をあらわす。耳朶は環状、耳穴は貫通する。天衣・条帛をまとい、下半身は裙の上に腰布を当てて上端を大きく折り返し、裾は深く足元を覆う。腕は正面の合掌手、宝鉢手の四臂に左右の脇手各々十九臂を加えた四十二臂。各々所定の持物を執り、正面を向き両足先をそろえて蓮台上に立つ。

光背は、拳身光。周縁を飛雲文で飾る。台座は、一重の蓮華座に岩座。

[品質・構造] 頭部はカヤ材か、体部はヒノキ材の寄木造。彫眼、黒漆塗り。白毫に水晶嵌入。

像の構造は、垂髻を除く頭部は耳後で前後二材を寄せ内割を施した後、左右のこめかみ部と頸部付根部に四つの柄穴を設けてヤトイ柄で接合し、三道かなり下で体部に挿首とする。

体部は前面部前後左右の四材、背面部に厚く左右二材と都合六材を寄せて根幹部を構成し、これに両側面に各々厚く前後二材をあて、さらに腰から下の厚みを出すために薄板状の別材二材を各々寄せて、像内を深く内割する。合掌手は肩、臂、手首で別材を矧ぎ付け、宝鉢手は臂、手首で別材矧ぎ付けとし、両手先は一材から彫出。その他の各腕は体部側面の脇手取付部材に臂以下を矧ぎ付ける。垂髻、頂上仏、変化面、阿弥陀化仏及び天衣垂下部、両足先、脇手持物等は各々別材製。宝冠、胸飾は銅板切抜きに鍍金。

光背は木造、漆箔。台座は木造、漆塗り及び彩色。

[保存状態] 頭部を除いて、垂髻・頂上仏・変化面及び体部全身は脇手を含めて江戸時代の後

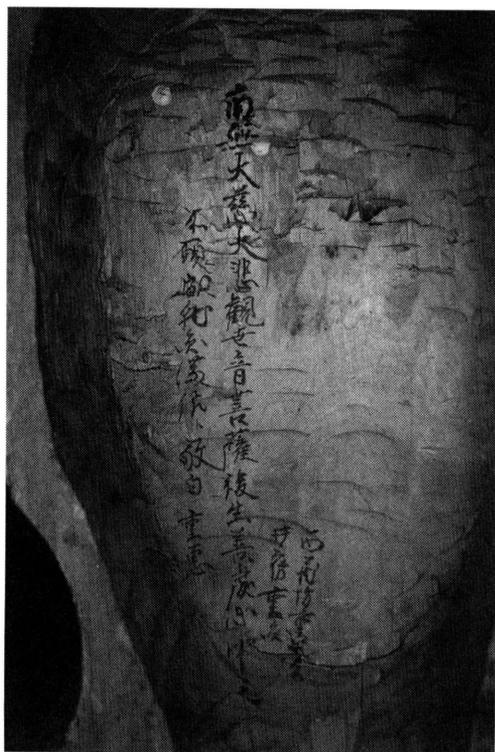


図9 慈光寺千手観音像 墨書銘（背面）



図10 同（前面）

補。光背、台座も江戸時代の後補。平成の修理は表面の布貼り・黒漆塗り及び変化面一面、白毫、持物のうち宝鉢・宝箭・宝鏡・宝経・羂索、光背の漆箔、台座の漆塗り及び彩色。

なお頂上仏の如来坐像は、様式技法から平安時代後半の古仏を転用したものとみなされる。

[銘文]

（像内頭部前面墨書銘）

大佛師法眼長慶

天文<sup>己酉</sup>年九月十九日造立之本願道覚

西藏坊御取持成就百日

（像内後頭部墨書銘）

西藏坊重誉

井上坊重圓

南無大慈大悲観世音菩薩後生善処心中也

所願成就圓滿給候敬白 重恵

（像内背面部再興銘札墨書銘）

于時享和貳龍集五月十七日鉦始メ 江府神田

奉彫刻千手大菩薩

大佛工 鈴木長四郎

林 宏一

菅原三之助

同七月朔日成就

三宅 平吉

塗師 関沼新助

(垂髻底部墨書銘)

大佛工

三宅平吉

鈴木長四郎

菅原三之助

初秋朔日

(垂髻丸柄側面墨書銘)

九十七世義然代

(右足先裏陰刻銘)

新堂建立并

本尊再興

享和二壬戌年

當院九十七世

現住 義然

(左足先裏陰刻銘)

江府神田

法橋光啓門人

佛工 鈴木長四郎

[法量] 単位センチメートル

像 高	270.0	髮際高	215.5	頭頂～顎	84.0
髮際～顎	24.5	耳 張	29.5	面 張	22.7
面 奥	32.4	肩 張	—	臂 張	—
胸 奥	40.0	腹 奥	40.0	裾 張	77.6
足先開(内)		同(外)			
光背高	327.0	同 幅	148.0		
台座高	38.0	同 幅	—	同 奥	—

前にも触れたとおり像内頭部の墨書銘及び体部の再興銘札等から、本像は天文己酉年、すなわち18年（1549）9月に道覚なる人物を本願として大仏師法眼長慶の造像するところとなり、その後約250年を経た享和2年（1802）7月慈光寺九十七世義然の代に江戸神田の仏工鈴木長四郎等により再興されている。この享和2年7月の再興は、同年4月の観音堂火災の難を受けてのもので<sup>4)</sup>、銘文の内容、彫刻様式や用材の違い等からすると、頭部は銘文のとおり天文18年長慶の作になるもの、体部その他の部分は享和2年再興時における鈴木長四郎等の手になるものと判断される。観音堂炎上の中かろうじて頭部のみが救出され、これにあわせて像のほぼ全身を再興修復したことが知られる。

慈光寺が永い歴史のなかでさまざまな変転を経ていることは寺伝・縁起類が語っているとおりだが、天文18年（1549）の本観音像造立がどういう経緯の中で立ち上げられたのかはこの銘文のみでは明らかにできない。寺伝によれば、戦国期の争乱のなかで松山城主上田案独斎朝直（?～1582）が比企地方に大きな勢力を張る慈光寺を焼討ちした話が伝えられている。同寺の

精神的支柱とされる開山塔（国指定重要文化財）が露盤銘から天文25年（弘治2年・1556）に再建されていること<sup>5)</sup>、またこの時期の慈光寺を中心とした歴史学的、考古学的研究の成果等から、この焼討ちはほぼ史実と認めていいようである。これを証明された梅沢太久夫氏は、その時期を天文15年（1546）から弘治2年の間に求められている<sup>6)</sup>。天文18年という年紀がまさにその時期に符合することに着目するなら、本観音像の造立は上田朝直による慈光寺焼討ち後の山内復興事業の一つとして企画された可能性はきわめて高い。この造立事業に携わった山内の僧侶として西藏坊重誉、井上坊重円及び重恵の名がみえる。西藏坊、井上坊は、慶長3年（1598）「検地帳」<sup>7)</sup>所収の二十二坊中に、また慶安元年（1648）「一山掟書」<sup>8)</sup>署名の二十九坊中にその名がみえ、かつて將軍頼朝の祈願寺として栄えた頃七十五坊あったとされる山内坊中の当時期における有力坊であつたらしい。ことに西藏坊重誉は前に示した天文25年の開山塔露盤銘に「願主権大僧都重誉」として名をみせることから、焼討ち後の復興事業の牽引者的役割を果たした人物とみなされる。この重誉を軸に考えるなら、天文18年の観音像造立と7年後の同25年の開山塔造営は山内復興の一連する事業であつたと理解される。このことからすれば慈光寺焼討ちは天正18年9月以前をほど隔たらぬ頃になされたものと推定され、また、はるか降って元禄元年（1688）に観音堂、同8年（1695）に釈迦堂が八十四世法印翁鎖の代によく再建されていること等を考え合わせると、焼討ちの災禍は慈光寺の主要伽藍の大半に及んでいたことがうかがい知られる。

さて、観音像の造立事情の検討はこれくらいにして、像の表現技法や作風について眼をうつしてみよう。3メートル近い大型像だけあって、堂々としたモニュメンタルな像容は坂東札所第九番本尊にふさわしいものがある。秀麗な目鼻立ちを刻んだ卵形の頭部と四十二臂をひろげて腰高に立つたくましい体軀の表現は、作者及び制作時期の違いをそれほど感じさせないまとまりのある仕上がりとなっている。

長慶の手になる頭部の表現を修理前及び修理中の姿等を参考にしながら眺めてみると、大型像だけあって蓮華院像ほどの繊細さはみられない。ことに面貌表現においてはそれが目立ち、ほどよく配置された目鼻立ちと豊頬長頤ともいってよい張りのある輪郭線で構成される本像の面貌は端正で落ち着きのある表情をつくり出してはいるが、蓮華院像にみられたシャープで一種生々しい写実描写はかげをひそめている。しかし、連珠文を挟んだ紐二条に列弁文を配した天冠台やその正面左右に一条の髪が巻き付き、額中央で大きく左右に分けられた地髪がこめかみ上部で半円状の同心円文に梳られ、鬢髪が一条耳に懸かる表現等に蓮華院像に共通した意匠がみてとれる。また、これだけの大きな頭部を耳後で前後2材矧ぎとする剛直単純な構造手法も蓮華院像の頭体部割矧造の手法に共通するもので、両者が同じ仏師の手になることをよく示している。

一方の享和2年（1802）に再興された体部のつくりも、謹厳な面貌を持つ頭部の表現にふさわしく、太造りで厚みのある肉身表現と複雑で装飾性に富んだ着衣表現によって重厚な雰囲気をよく表わしていて、再興仏師鈴木長四郎等の彫刻技術がなかなかのものであったことをうか

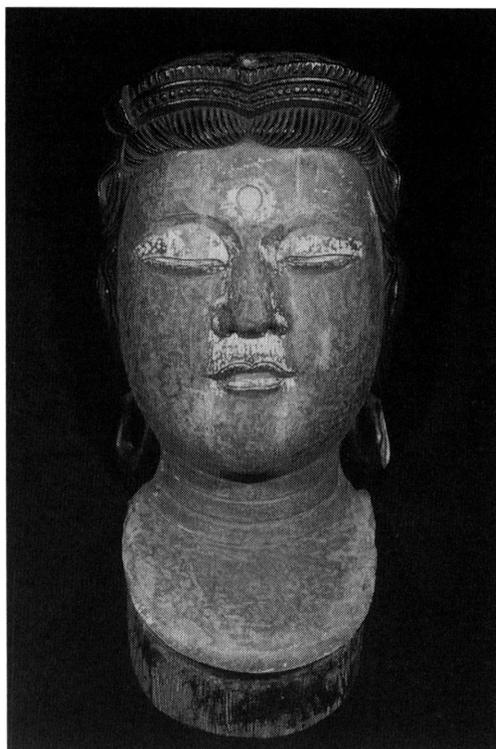


図11 慈光寺千手観音像 頭部前面（修理中）



図12 同 全身像（修理前）  
撮影 杉山晃造氏

がわせる。江戸時代後期の仏師としては評価すべき仕事振りといえよう。

### 3. 仏師長慶と鎌倉地方造仏界

現在確認されている長慶の事績は、この天文16年（1547）蓮華院千手観音像と同18年慈光寺千手観音像頭部の2件のみである。蓮花院像の銘札に「鎌倉仏師」と記されていることから、長慶は鎌倉の地に本拠をおく仏師であったとみて誤りなからう。作風もこの時期の鎌倉地方彫刻に共通する特色が認められるところからも、そのことが裏付けられる。ことに蓮華院像に強くみられる、一種なまなましい現実感をただよわせた繊細怜悧な面貌描写や装飾味にまさった頭髪表現、また頭奥・体奥ともに厚めでやや猫背気味の側面観や図式的で説明的な衣文表現などに、南北朝から室町時代全般を通じての鎌倉地方彫刻様式の特色を見いだすことができる。

さて、この長慶だが、彼と同じく「長」の字を通字として、ほぼ同時期に武相地方で活発な活動をしている鎌倉仏師に長勤と長盛という仏師がいる。長勤は享禄2年（1529）から永禄12年（1569）わたって7件の事績が、もう一人の長盛は享禄5年（1532）から天正9年（1581）に及んで9件の事績が確認されている。この二人の仏師については既に本紀要の第10集及び11集で論述しているのでここでは詳しく触れないが<sup>9)</sup>、ともに「長」の字を共有し、作風もよく

似るところから一門の仏師とみて間違いはない。いずれの作品にも、写実的で理知的な慶派彫刻を基調に中国宋元美術の世俗性と装飾性を加味した、いわゆる後期宋風彫刻と評される表現様式の特徴が濃厚に表れていることがそれを裏付けている。

今のところ長慶の事績は、長勤や長盛と違い彼の本拠地と考えられる鎌倉地方では確認されていない。天文16年の蓮華院像、その2年後同18年（1549）の慈光寺像も武蔵北部地域での仕事である。今後新たな作品が検出される可能性はあるが、あるいは長慶は当方面を主な仕事場とする仏師であったかもしれない。また、長勤や長盛は新仏造立とともに旧仏の修理をおおく手がけているが、長慶のたずさわった造仏は、現在のところ再興とはいいいながらいずれも新仏造立である。蓮華院像、慈光寺像ともにそのはじまりは遠く奈良時代に遡るという由緒ある霊像の再興であり、さらに慈光寺像の場合は270センチメートルを測る大型像の造仏ということから考えると、長慶は、そうした遠近の人々の耳目を集める大事の造仏事業にふさわしい技量と地位の持ち主として評価されていた存在とみなされ、一門の中では長勤や長盛よりは先輩格にあたる仏師であった可能性もうかがえる。

一方、この長慶の天文18年慈光寺千手観音像造立に関連して注目されるのは、その同じ年に「筑後」という仏師が慈光寺にほど近い小川町大字中爪小字鷺ノ巣の円通寺本尊聖観音立像を造立していることである。同観音像はカヤ材の割矧造、彫眼、頭髮を群青、眼・眉を墨彩、唇を朱彩する以外は木肌をそのまま生かした素地仕上げからなり、像高は80.8 cm、現在近くの本寺普光寺に安置されている。丈高く結い上げられた垂髻、中高でまなじり切れ上がったきつめの表情、通肩に身体を深く被った厚手の法衣等の表現に当時流行していた中国趣味がつよくうかがえる像で、その構造は右手先と左足先（後補）に別材を矧ぎつける以外は、頭体部全体を一材から彫り出して耳後で前後に割矧ぎ内割の後、頭部は三道下で割首とするといった剛直単純な手法を用いている。この観音像の像内後頭部に次のような墨書銘が記されていた。

「於カ慈カ光山ノ大佛師 筑後作之ノ天文十八己酉十一月」<sup>10)</sup>。初行2文字めは「慈」と読まれ、これによれば天文18年（1549）11



図13 円通寺聖観音像（普光寺保管）

月に大仏師筑後が慈光山において之をつくったことが明らかにされる。同年9月19日に造立された慈光寺千手観音像に遅れること僅か2か月後のことであり、しかもその製作場所が「慈光山」、すなわち慈光寺であった。この仏師筑後についてはあらためて検討を加える予定だが、当観音像のほか翌天文19年(1550)5月に府中市普門寺の木造地藏菩薩半跏像を造立しており<sup>11)</sup>、また、さかのぼって同3年(1534)に藤沢市藤元寺釈迦如来像(今亡)<sup>12)</sup>を、さらに天文6年(1537)に神奈川県大井町義寺の木造地藏菩薩坐像を修理していることが確認されている<sup>13)</sup>。普門寺像の像内墨書銘に「鎌倉住作者筑後」とみえることから、筑後もまぎれもなく鎌倉仏師の一員であり、長慶、長勤、長盛等とともにほぼ同時代を生きた仏師であったことが明らかとなる。

この事実は、さまざまなことを示唆してくれる。一つは、慈光寺千手観音像の銘には名がみえないが、筑後も長慶に従ってその造像に携わっていた可能性がきわめて高いことがあげられよう。これは3メートル近い大型像であれば当然のことで、数名の仏師が長慶の下で作業に従事していたことは予想に難くない。おそらく筑後は長慶を助ける脇仏師のような立場で仕事をしていたのであろう。既にいくつかの造仏・修理を経験しており、同年造立した観音堂像では大仏師と称していることからそのことがうかがえる。二つは、このことと連動して天文16年(1547)の蓮華院像の造像にも筑後が加わっていた可能性が考えられることである。この根拠となるのは、蓮華院像と観音堂像にみられる像の全身あるいは頭部をカヤの一材から木取りして前後に割矧ぎ、割首とする単純明快な構造手法や後期宋風彫刻の特色をよくあらわした様式表現にきわめて共通したところが見いだせることによる。両像とも決して洗練された作品とはいえず、ローカル色のめだつ造形表現となっているが、筑後の手になる観音堂像にはことにそれが著しい。観音堂像はかつて火中して全身を炎になめられた痕跡があり、後世表面を大幅に浚いなおされていることから多少割り引いてみる必要はあるが、ぎこちない立体構成や表情に乏しい面貌表現、形式化した衣文表現等にそれがよく表れている。この観音堂像をみると、蓮華院像の場合も頭部は長慶が手がけ、胴部は筑後が担当したのではないかといった想像も禁じえない。さて三つは、天文18年というこの時期、慈光寺山内に造仏工房が存在していた形跡がうかがえることである。ここでいう工房とは、注文主の需めに応じて現地に赴き、短期間臨時に構えた仮設の職場ではなく、しかるべき規模の施設・設備と組織を有してほぼ恒常的に営まれる工房の意味で、筑後が「於慈光山」と銘したことがその存在を示唆している。千手観音像の造像は用材の準備から人員の確保、本体の彫刻・脇手や変化面等の各部品の製作、さらには光背・台座の造作や表面の彩色荘嚴などのことを考えると、すでに前年の天文17年には着手されていた可能性が高い。筑後の聖観音像も、80センチメートルという法量からすると2か月での造像は困難と思われ、当然千手観音像の造像に平行して作業が進められていたものと考えられる。そのためには相応の規模の施設・設備と組織を備えた工房が必要となろう。山内の堂塔伽藍に多大な被害を与えたとみなされる焼討ち後の復興事業ともなれば、ほかにも小規模な修理・造仏が継続してなされていたと考えられ、仮設的な職場ではとうてい処理できな

い作業量であったと推測される。さらに奈良時代の草創にかかり古代から中世にわたって関東天台の大寺として勢威を振ってきた慈光寺のことゆえ、時々の旧仏の修理や新仏の造立に備えて山内に造仏所をおき、寺付きの仏師を抱えていただろうことは容易に想定できることである。その時代、時代によって寺付きの仏師は交替したであろうが、戦国期のこの時期は鎌倉仏師が慈光寺御用仏師として登用されていた可能性も考えておく必要はあろう。

以上、天文18年（1549）に長慶と時と場所を同じくして造仏活動をしていた筑後の存在から導き出される両者の関係、あるいはこの時の慈光寺山内の造仏環境について憶測を交えて検討を加えてみた。これらのことをふまえて推測すると、長慶と筑後は同門の仏師であり、また長勤、長盛等とも同じ系統の仏師集団に属していたものと考えられる。その正否は今後の研究調査に俟つことにして、天文18年に慈光寺において鎌倉仏師が継続して造仏活動を行っていた事実は、この時期の鎌倉仏師の動向を追求するうえに貴重なヒントを与えてくれるものといえよう。

## まとめ

天文16年入間市蓮花院千手観音像、同18年埼玉県ときがわ町慈光寺千手観音像の作者長慶について、その作風および同時代の鎌倉仏師との関係等について紹介・検討を行ってみた。

今後新たな作品が検出される可能性はあるが、長慶は長勤、長盛あるいは筑後とほぼ同時代の天文年間を主な活動期とした鎌倉仏師であることが明らかになった。

その作風は、後期宋風彫刻を基調とした当代の鎌倉地方彫刻様式を大きく外れるものではなく、頭部の面貌表現や頭髮描写によく認められるとおり、写実と装飾性をかねそなえた平俗精美な造形表現を特色としている。ただ、蓮華院像の体部にみられる生彩感に乏しい硬直化した立体構成や形式化著しい衣文表現は往年の鎌倉地方彫刻とはおおきな隔たりを見せるところで、細部表現に優れ全体表現に劣る戦国期の鎌倉地方造仏界の特質が顕著に表れていることは否めない。また、同時期関東各地で活動していた在地仏師たちの武骨で粗野な造形に一脈通じるローカル性が強くみとれることも、この頃の鎌倉仏師たちが置かれていた造仏環境の一端をうかがわせるものがある。

はたしてこの長慶をはじめ長勤、長盛等「長（チョウ）」を通字とする仏師たちが、応安5年（1372）の「加賀坊長慶」・「伊予法眼ちゅうけい」を含めて、14世紀後半から15世紀前半にわたって武相地方で活躍した「朝（チョウ）」を通字とする詫間派仏師たちとどのようなつながりを持つのかはいまだ明らかでないが、同じく「チョウ」と称し、様式技法も類似することから考えると詫間派仏師を継承する仏師集団であったとみて大きな誤りはないように思われる。一方、この天文間は鎌倉仏師たちの活動の活況期といってよく、一時代前の下野法眼弘円（文明～大永年間）の後を継いで上総法眼宗琢（永正～天文年間）、豊前法眼円慶（享禄～天文）、帥法眼泉円（天文年間）といった仏師たちも武相各地で新仏造立や旧仏修理に腕を振っている<sup>14)</sup>。戦国期の動乱による寺社施設の破壊焼損、それに伴う新旧勢力の交替による復興支援と

いった当時の時代状況が、こうした活況を後押ししていたことも考えられよう。

ともあれ、そうした時代のなかで活動していた鎌倉仏師のひとりに長慶という仏師がいたことを確認して、この稿を終えることにする。

## 註

- 1) 林宏一「鎌倉仏師民部について―埼玉の造仏活動から―」 埼玉県立博物館紀要-29 2004  
同 「弘治二年再興銘をもつ騎西町医王寺の木造薬師如来坐像について」 東京家政大学博物館紀要第10集 2005  
同 「日高市正音寺の千手観音三尊像と鎌倉仏師」 東京家政大学博物館紀要第11集 2006
- 2) 山本勉他『法性寺如意輪観音菩薩像の研究―修理完成を機に』 北海道教育委員会 1995  
浅見龍介「宝戒寺惟賢和尚像について」 鎌倉87 鎌倉文化研究会 1998
- 3) 平成7・8年度に解体修理が実施され、矧ぎ目の緊結・後補の彩色除去と表面の古色塗り、欠矢箇所への修補が行われた。修理担当技師は桜井洋、亀井政男両氏。
- 4) 『慈光寺略誌』(大正2年・1913 慈光寺編)によれば、享和2年4月27日観音堂、大師堂が焼失とみえる。
- 5) 露盤は現存しない。銘は「武州天台別院都幾山慈光寺開山塔造宮并奉鑄舛形／願主権大僧都重誉／天文廿五年丙辰二月六日／西藏坊 大工小韓 仕口松本日運動」とあった。(稲村坦元編『武蔵史料銘記集』 東京堂出版 1966)
- 6) 梅沢次久夫「中世の慈光寺と僧坊」(金井塚良一編『慈光寺』 新人物往来社 1985)
- 7) 「武州比企郡都幾山慈光寺御繩打之水帳」 慶長三年九月六日 慈光寺蔵
- 8) 「山林竹木等掟書」 慶安元年二十日 慈光寺蔵
- 9) 註1 参照
- 10) 解説は川瀬由照氏(文化庁)。平成13年3月24日、小川町史編纂事業に伴う町内仏像調査として実施した際の調査成果による。銘の所在は早くから知られており、『埼玉県美術工芸品(彫刻)所在緊急調査報告書Ⅱ』(埼玉県教育委員会 1986)に一部が報告されている。
- 11) 斉藤経生・若林繁『府中市郷土資料集5 府中市の仏像』 府中市郷土館 1981
- 12) 『鎌倉の在銘彫刻(室町時代)』 鎌倉国宝館 1976  
山田泰弘「鎌倉在銘彫刻一覧」『鎌倉の在銘彫刻Ⅱ』 鎌倉国宝館 1986
- 13) 薄井和男監修『大井の仏像』 神奈川県大井町教育委員会 1996
- 14) 註12に挙げた史料のほか、以下の文献を参考とした。  
三山進「鎌倉地方造像関係資料」第2集 鎌倉国宝館論集第十二 1968  
同 「仏師長盛について」 鎌倉7 鎌倉文化研究会 1961  
同 『鎌倉彫刻史論考』 有隣堂 1981

## 【後記】

この小稿を作成するにあたって、次の方々にご協力、御教示を賜った。お名前を記して心から感謝の意を表させていただきます。

蓮華院 慈光寺 普光寺

杉山晃造 齋藤祐司 堀口浩史 清水誠司

人間市教育委員会 ときがわ町教育委員会 小川町教育委員会